

若手自ら考え担う、定置漁業の未来 —就業から定着への工夫—

株式会社早田大敷
中井 恭佑

1. 地域の概要

三重県南部に位置する尾鷲市は、面積約 193 平方キロメートル、人口 1 万 5 千人の地方都市である（図 1）。西には大台ヶ原山など紀伊山地の山々が連なり、東には黒潮が流れる熊野灘を臨んでいる。海岸は全国でも有数のリアス海岸で、多くの湾が入り組み、天然の良港を形成している。

また、黒潮の影響も受けた温暖多雨な気候により、古くから漁業や林業が栄えてきた。

市内の多くの漁村では、古くからブリ大敷（定置網）が操業され、ブリが漁村地域の経済を支えてきたこともあって、市の魚に指定されている。

早田（はいだ）地区は市の南部に位置する湾奥の小さな集落で、かつては漁業の町として栄えた。しかし、昭和 35 年の人口 678 人をピークにして過疎化と高齢化が進み、現在は 95 人、高齢化率約 71.6%の限界集落となっている。

（人口は R6. 10. 31 時点（市の HP から引用））



図 1. 尾鷲市早田町位置図

2. 漁業の概要

早田地区には、かつて早田漁業協同組合があったが、組合員の減少と経営の合理化のため、平成 23 年 7 月に尾鷲市内の 3 漁協が合併して尾鷲漁業協同組合となった。さらに、平成 30 年 9 月には尾鷲漁協を含む 3 漁協が三重外湾漁業協同組合に加わった。現在、早田地区の組合員は 33 人、うち正組合員は 14 人である（令和 6 年 11 月末日時点）。地区では、大型定置網 1 ヶ統のほか、小型定置網、イセエビ刺し網、一本釣り等の漁業が営まれている。中でも株式会社早田大敷が経営する地区唯一の大型定置網「早田大敷」は、地区の水揚げ数量及び金額の 9 割以上を占めており、地区の基幹産業として重要な役割を担っている。なお、早田大敷ではブリ類が水揚げ数量の 6 割以上を占めている（図 2）。

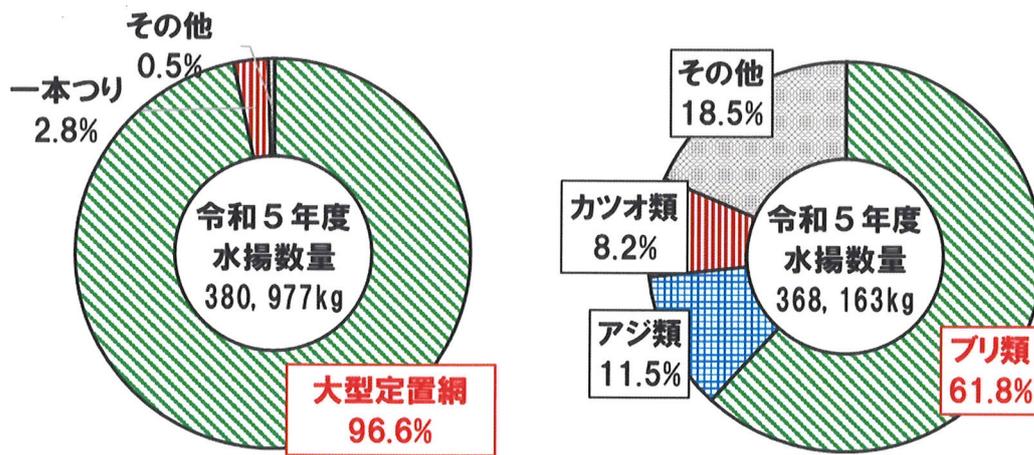


図2. 早田地区における漁業種類と大型定置網の主要魚種（令和5年漁期、水揚数量ベース）

3. 研究・実践活動取組課題選定の動機

漁業を中心に繁栄してきた早田地区にとって、人口減少に伴う漁業者の減少や後継者不足は、地区の存続を脅かすものである。そこで、平成21年度より、地域住民に官学（官：三重県・尾鷲市、学：三重大学）を含めた地域活性化をめざすグループが発足し、地区の再生に向けた動きが始まった。その中で、地区の基幹産業である大型定置網の存続が地区の活性化に必要な不可欠とされ、当時、高齢化が進み、担い手不足により存続が危ぶまれていた早田大敷への担い手確保が重点的に取り組まれることとなった。

その担い手確保の一環として漁協や尾鷲市と連携して取り組んだのが「早田漁師塾」である。早田大敷では、それまでも尾鷲市の漁業体験教室や短期研修の就業希望者を受け入れていたが、いずれも3泊4日という短期間であり、移住後の生活イメージが持てないままに終わっていた。そこで、早田漁師塾では、研修期間を4週間（図3）に長期化し、定置網での漁業体験とともに早田地区での生活や人付き合い等の実体験も含めて早田地区の魅力を感じてもらうことにした。その結果、全国からIターンやUターンの就業希望者が集まり、一時は乗組員の半数以上が40歳代以下となるほどの若返りが実現した（図4）。しかし、地区での生活には馴染めたものの、漁業の現場が体力を必要とする3K（きつい、汚い、危険）な現場であることや収入面での不安があることを理由に、就業後3年ほどで離職してしまう人が多かった。

	日	月	火	水	木	金	土
1週目							
漁業体験	開講式	釣り操船	釣り操船	ケンケン操船	ケンケン操船	ケンケン操船	休日
座学研修							
2週目							
漁業体験	大型定置	大型定置	大型定置	大型定置	養殖	大型定置	地域イベント補助
座学研修	-	ロープワーク	定置網研修	漁村の暮らし	市場・流通	-	-
3週目							
漁業体験	小型定置刺網網修繕	小型定置刺網網修繕	小型定置刺網網修繕	養殖	小型定置刺網網修繕	小型定置刺網網修繕	休日
座学研修	-	-	-	-	-	-	-
4週目							
漁業体験	大型定置	大型定置	大型定置	大型定置	大型定置	閉講式	
座学研修			漁業者講話	面接	総括		

図3. 早田漁師塾のスケジュール例

そのため、早田大敷では、早田漁師塾による担い手確保の取組に加えて、乗組員の定着に向け、国の補助事業等を活用しながら、操業体制や就労環境の見直しに取り組むこととした。

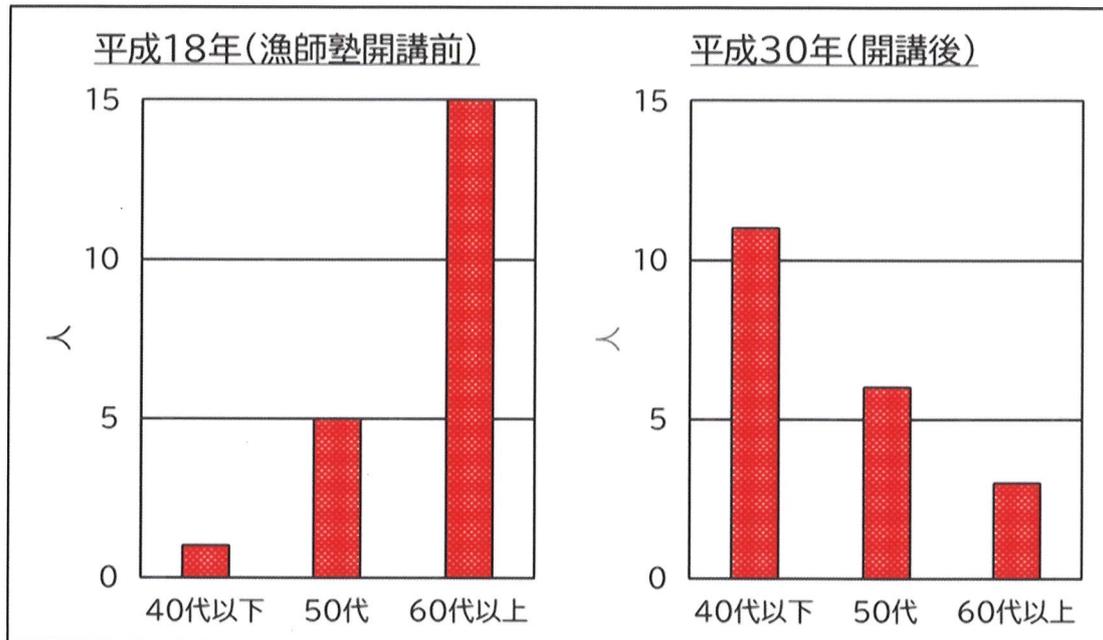


図4. 漁師塾開講前（平成18年）と開講後（平成30年）の乗組員の年齢構成

4. 研究・実践活動状況及び成果

【操業体制の見直し】

- ・ 定置網モニタリングシステムの構築

定置網に魚探を設置し、出漁前に入網状況や潮流が確認できるシステムを整備。以前から設置されている潮流計と合わせて使用することで、操業の効率化を図った。

- ・ 尾鷲市場への水揚げ

仲買人が多数集まる市場への水揚げによる魚価の向上に取り組んだ。

- ・ ブリの出荷調整

近隣の定置網において水揚げが集中することによる魚価の下落への対策として、自社の生簀にブリを入れ、出荷時期をずらすようにした。

定置網モニタリングシステムの構築により、これまで経験や勘に頼っていた入網状況や潮の流れを見える化することで、出漁後の待機時間が解消されたほか、予想される漁獲量に見合った氷の積載ができることで、年間氷代が取組前の平成27年度に比べ約6割に削減された（図5）。

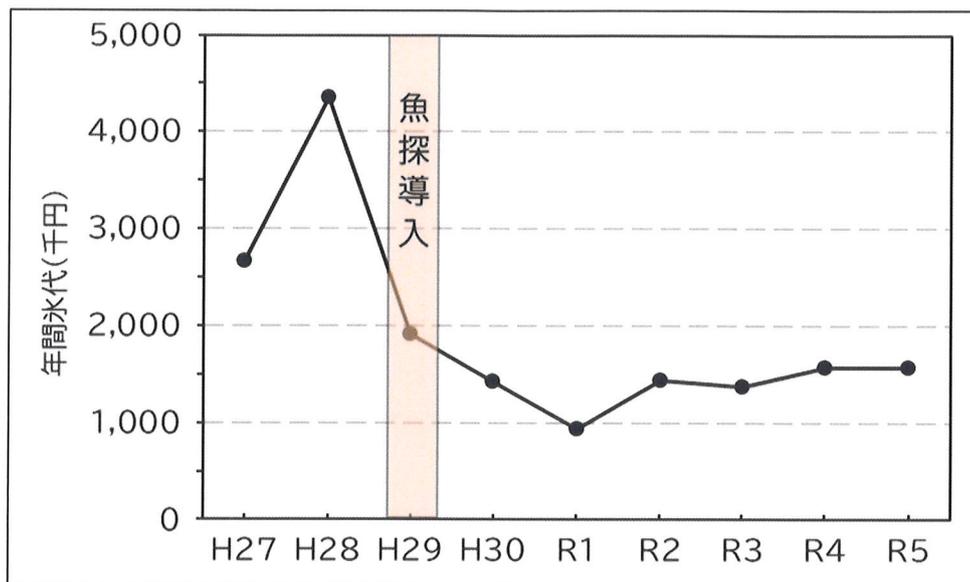


図5. 年間氷代の推移 (H29年度に魚探導入)

また、獲った魚の需要が高まる時期に出荷を調整することや高値の付く市場への水揚場所の変更といったより高く売るための工夫をしたことにより、主要な水揚魚種の平均単価が約3割向上(図6)し、魚価の向上につながった。

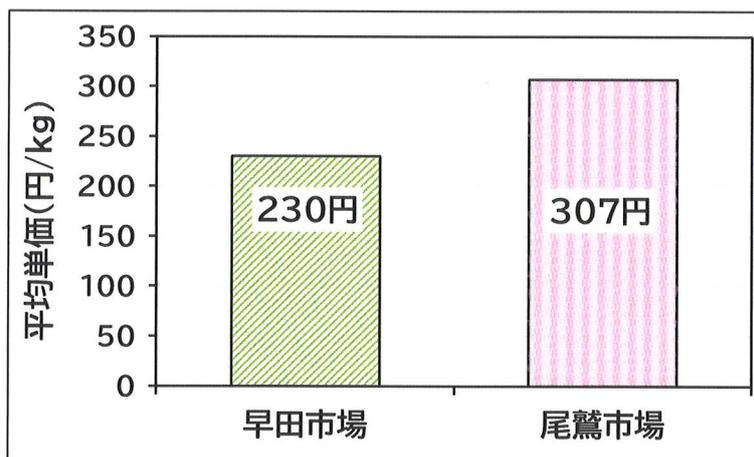


図6. 早田大敷の早田市場と尾鷲市場での主要な水揚魚種の平均単価の比較
 早田市場の魚価：平成22～26年度における5中3平均単価
 尾鷲市場の魚価：令和3年度の平均単価

【就労環境の見直し】

- ・ 漁船の大型化（総トン数 6.6 トン→19 トン）（図 7）

作業スペースの確保、航行・作業時の安定化

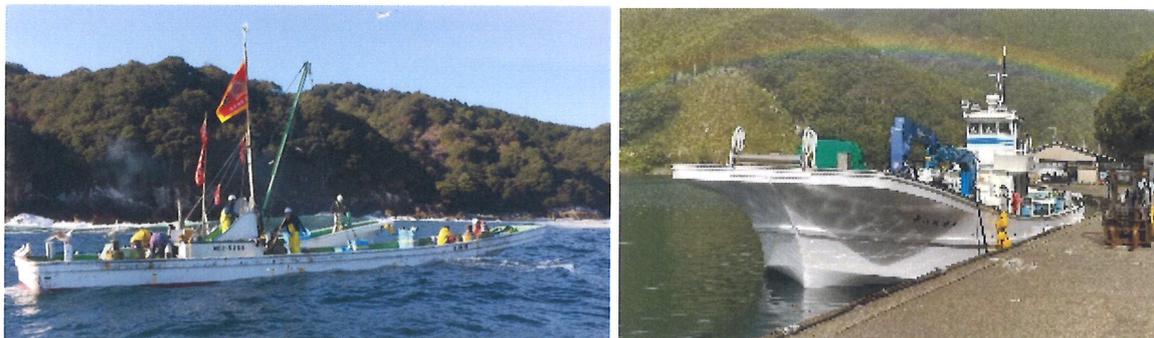


図 7. 旧船（左）と新造漁船「第八明神丸」（右）

- ・ 漁労機器（船上型選別装置、手動式活魚締め機、フリーズフィッシュ）の導入
（図 8）

作業効率の向上と軽労化



図 8. フリーズフィッシュ（左）と手動式活魚締め処理機（右）

旧船では、手狭で、よく揺れる危険な環境での労働が強いられてきたが、船を大型化したことで、乗組員の作業スペースが十分に確保され、安全性や作業性が改善した。また、定置網の巻き上げ方法の改良を行うとともに、手作業で行っていた魚の選別や活締めを機器を用いて行うことにより、作業の効率化及び軽労化が実現し、より少ない人数での操業が可能となった。

以上の取組の結果、取組前の平成 28 年漁期の水揚高 1 億 9,315 万円に対し、取組後の令和 4 年漁期は水揚高 1 億 6,293 万円で、約 3,000 万円水揚高が少なかったにもかかわらず、給与等の人件費やその他の経費などを 3,200 万円削減できたため、営業利益が 200 万円増加している。また、取組後は乗組員の給料を約 4 万円増やすことができ、乗組員の収入面の不安が改善された。

さらに、3K な就労環境が改善され、乗組員が安心感を持って働けるようになり、現在は 14 名の乗組員のうち、8 名が勤続 3 年以上となるなど、定着が進んでいる(図 9)。

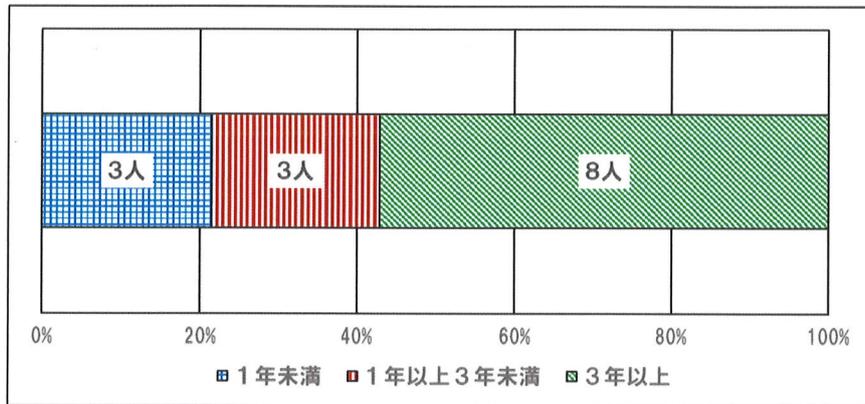


図 9. 乗組員の勤続年数 (令和 6 年 11 月時点)

5. 波及効果

これらの取組により、早田大敷の就労環境は、これまでの「漁業＝収入が不安定かつ 3K」というイメージを覆し、安全安心な職場として認知され始め、令和 5 年の夏には県外から女性乗組員 1 名が就業した。それまで、地区では女人禁制とされてきた職種であったが、これも就労環境の見直しによる成果と考えている。このように、女性でも漁業に就業できるという実例は、さらなる担い手確保の可能性を広げるものである。

そこで、全国的にも珍しい女性乗組員の誕生を情報発信強化の契機ととらえ、各種 SNS で女性乗組員の働きぶりや漁労作業以外での日常を投稿している(図 10)。そのことが功を奏し、令和 6 年の秋には 2 人目の女性乗組員が就業した。漁業に興味がありながらも決断しきれない人に対し、行動するきっかけになればとの思いから、引き続き情報発信を強化していきたいと考えている。

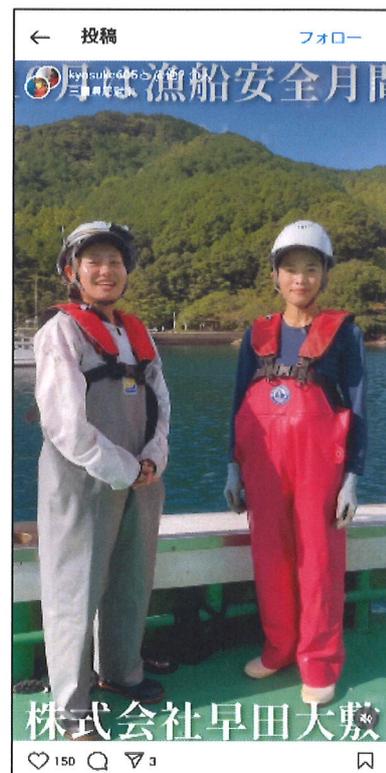


図 10. 女性乗組員による情報発信 (早田大敷 Instagram より)

6. 今後の課題や計画と問題点

早田大敷では、さらなる乗組員の定着に向け、乗組員からの会社経営の改善につながる提案を積極的に採用している。乗組員に会社経営への参加意識を持ってもらうことで、仕事へのモチベーションの向上とやりがいにつながるとの考えからである。以下に乗組員の提案をきっかけに始めた取組を紹介する。

1つ目は、「ブリのブランド化」である。もともと、早田大敷では、船上での活締めによってブリの鮮度や品質の向上を図っており、仲買人から高い評価を得てきたが、その中でも特に高品質なブリを「結（ゆい）」としてブランド化する取組を始めた。「結」ブランドは、船上活締めしたブリのうち、乗組員の目利きにより選抜した中で、脂肪含有率15%以上の基準を満たした個体に与えている。実際、「結」の単価は無印の氷締めブリに比べて1.5～2倍程度と、高評価を得ている（図11）。



図11. ブランドブリ「結」(左) とロゴ (右)

2つ目は、先述した出荷調整から発想を得た「ブリの肥育・養殖」である。定置網に入網する出荷に適さない痩せたブリを生簀で養殖し、肥育することで、魚価を向上させる取組を始めている。このブリには、定置網で漁獲される低利用魚を餌として有効利用することで、餌代の節減にもなっている。

3つ目は、「定置網観光ツアー」の開催である。早田地区の活性化や魚食普及の拡大のためには、漁村の交流人口を増やし、より多くの人に漁業や魚に興味を持ってもらうことが重要であるとの考えから、尾鷲市や早田地区を訪れた観光客が漁船に乗船し、定置網漁業の様子を見学してもらうツアーの開催を検討している。この取組が、最終的には早田大敷の収益向上にもつながると考えている。

このように、早田大敷では、幹部だけでなく従業員一人ひとりが主体的に考えてアイデアを提案し、実践していくことを社風とすることで、人が集まりやすくなり、就業希望者が増えるといった好循環を生むことができている。

今後も従業員一丸となって様々なアイデアを活かしていくことで会社のさらなる経営改善を図るとともに、担い手を確保し、漁業や地区の活性化につなげていきたい。